

- II-5 妊娠時の血圧値と将来の心血管疾患発症リスクとの関連性について
 ○大石舞香 飯野香理 田中幹二 樋口毅 水沼英樹
 (弘前大・院医・産科婦人科学)

【目的】過去に妊娠高血圧症候群や妊娠糖尿病、早産などの周産期合併症を発症した女性が生後、cardiovascular diseases (CVD) を高率に発症することが複数の疫学研究で報告されてきた。女性にとって循環及び代謝が劇的に変化する妊娠は CVD に対するストレステストとなり得る可能性がある。そこで、我々は母子手帳に記載された過去の妊娠時データを利用して妊娠中の血圧値と将来の CVD の発症との関連性について後方視的に検討した。

【方法】2011年6月から2015年9月に実施された青森県弘前市の一般検診及び岩木健康増進プロジェクトにて、事前に母子手帳の持参を依頼し協力の得られた735名のうち、次の条件を満たす534名を解析対象とした。1)単胎、2)対象となる分娩から5年以上経過、3)妊娠中の血圧値の測定が5回以上、4)妊娠前に高血圧症及び脂質異常症を発症していない。また、複数の母子手帳を持参した対象者においては初産の妊娠データを採用した。次に母子手帳のデータより妊娠中の全周期における血圧値の平均値を算出し調査時の高血圧症、脂質異常症、糖尿病、Pulse Wave Velocity(PWV)値、Ankle Brachial Pressure Index (ABI) 値、生化学検査値との関連性について解析を行った。

【結果】対象者534名の調査時の年齢は53.1±9.8歳、観察期間は26.7±11.1年であった。母子手帳の記載記録より20名(3.4%)が少なくとも2回以上妊娠高血圧症候群(PIH)の診断を満たしておりこれらを「PIH群」、20名を除いた564名を「非PIH群」とした。多変量解析の結果、「非PIH群」の妊娠時拡張期血圧平均値は有意に将来の高血圧症(OR:1.52, 95%CI:1.15-2.01)*及び脂質異常症(OR:1.36, 95%CI:1.03-1.80)*の発症と関連していた。また、「非PIH群」の妊娠時収縮期及び拡張期血圧の平均値はPWVと弱いながらも有意な相関関係を示した(P<0.05)。次に、「非PIH群」を妊娠時の血圧値で4群に分け、同様に多変量解析を行った結果、妊娠時の収縮期血圧平均値108mmHg未満の群はその他の群に比べて将来高血圧症となるリスクを有意に減少させていた(OR:0.44, 95%CI:0.22-0.89)。さらに妊娠時の拡張期血圧70mmHg以上の群は将来の高血圧症(OR:1.99, 95%CI:1.18-3.35)及び高脂血症(OR:1.82, 95%CI:1.08-3.06)の発症リスクを有意に上昇させていた。

【考察】母子手帳のデータによる後方視的解析により、「非PIH群」に限定してもなお妊娠中の血圧値が将来のCVD発症リスクと関連する可能性が示唆された。分娩後という比較的若い年齢で自身の心血管イベント発症のリスクについての情報を得ることは多くの女性の健康寿命延長に寄与すると期待できる。

*標準偏差1増加に伴うORを示す。

- III-6 大量出血が予想される症例に対する院内調製
 クリオプレシビエートの有用性
 ○金子なつき 久米田麻衣 小山内崇将 田中一人
 玉井佳子 伊藤悦朗
 (弘前大学医学部附属病院 輸血部)

- III-7 胃癌手術における骨格筋量と術後合併症の検討
 ○若狭 悠介 室谷 隆裕 和嶋 直紀 赤坂 治枝
 吉田 枝里 袴田 健一
 (弘前大・院医・消化器外科学)